

平成 22 年 4 月 28 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2009

課題番号：19730319

研究課題名（和文） 学習スタイルから検討した国際会計教育フレームワークの構築

研究課題名（英文） The role of learning style towards the framework development for the international accounting education

研究代表者

菅原 智（SUGAHARA SATOSHI）

広島修道大学・商学部・准教授

研究者番号：40331839

研究成果の概要（和文）：本研究では、諸外国で会計を学ぶ大学生を対象に、学習スタイルと文化的影響の関連を調査した。研究の結果は、個人主義の国出身の学生が「行動して学ぶ」スタイルを好むのに対して、集団主義の国出身の学生は「観察して学ぶ」スタイルを好む傾向にあることが明らかとなった。本研究の結果より、IFAC は、文化的要因が学生の学習スタイルに影響を与えることを考慮したうえで、会計教育の国際的統一を進めていくことを示唆した。

研究成果の概要（英文）：This research aims to investigate the role of cultural dimensions towards learning styles among accounting students from several countries. The result of this research revealed that the more strongly students has individualistic trait the more likely they prefer “learning by doing” as their favorable learning style, and vice versa. Given this above finding, this study provided several suggestive ideas to achieve smooth implementations of the global convergence of accounting education.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	0	900,000
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	510,000	3,110,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経営学・会計学

キーワード：国際会計、国際会計教育

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の必要性は、2003年国際会計士連盟（IFAC）による IES（職業会計士のための国際教育基準）の発行と係わりと  
ころが大きい。この IES は、各国で異な

る会計士の教育制度を調和化して IFAC 加盟国の職業会計士の質的水準を保証し、国際的な業務の円滑化を推進するために公表された。しかし、欧米諸国が主導となって採択した IES は、世界の他の諸地

域でこれまで実践されてきた会計教育制度とは大きく隔たりがみられる場合がある。例えば、ある先行研究によれば、儒教的集団主義思考が残るアジア諸国では、個人主義的思考に基づいた職業会計士倫理観と相容れない場合がある (Ding *et al.*, 2005)。

この問題に関し、別の研究では、Hofstede=Gray モデルを通して、諸外国の個人/集団主義や不確実性回避などの4つの文化的要素の違いが、会計基準、職業的判断や倫理観に影響を与えていると主張する (Gray, 1988)。このモデルに基づけば、文化的背景の異なる国家間での IES の理想実現は難しい。ところが上記の見解とは別に、学習スタイルの理論からは、ある一定の職業に携わる人間は類似の学習スタイルを有する傾向があり、学習スタイルは様々な外的要因によって変化するとともにいわれる (Kolb, 1984)。そこで、会計に携わる人間、特に会計を学ぶ学生は、文化的相違を超越した固有の学習スタイルがあるかもしれないという仮説が導かれる。もしこの仮説が証明できれば、学習スタイル理論を応用して、会計教育の調和化を導く教育的手法 (教授法やカリキュラム等) を開発することも可能となる。そして IES の理想である多文化間での会計教育の質的水準を実現することができるはずである。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、第一に、日本の大学や大学院で会計学を学ぶ学生の学習スタイル (Learning Styles) の実態を把握することにある。学習スタイルは人間の職業選択や専攻科目と密接な関連を有する (Kolb, 1984)。本研究では、Kolb (1984) の学習スタイル・モデルを利用して会計を学ぶ学生に特有な学習スタイルを究明し、高等教育機関 (大学や大学院) が職業会計人の職業倫理教育や職業意識教育に有効に活用する方法を提言することを目的とする。特に、近年の劇的な社会変革の中で求められる会計士の新しい役割・能力を育成するための、あるべき学習スタイルを提示することを検討した。

本研究の第二の目的は、日本の会計を学ぶ学生の学習スタイルと諸外国のそれ

とをいくつかの文化的側面から比較・分析することにある。当該調査では、サンプルの学生に観察される学習スタイル選好を各国間で比較し、その相違の程度や文化的要因の影響などを明らかにする。研究の最終段階では、IES の理念の実現に向けての戦略的方策を模索した。

## 3. 研究の方法

本研究が学生の学習スタイルに注目したのは、学生の学習スタイルの選好が、人間の性格と同じく、職業選択に大きな影響を及ぼす重大な要因と考えられるからである。学習スタイルの学術的権威者である Kolb は、長年の研究により、人間の学習スタイルを4つの指標で診断するラーニング・スタイル・インベントリ (LSI) を考案した (Kolb, 1984)。これまで海外では、職業会計人や会計を専攻する学生を対象に、Kolb の LSI を用いて学習スタイルを特定する研究が数多くなされてきた。しかし、日本においては、同様の研究は会計教育の分野で全く行われていない。本研究は、日本における会計を専攻する学生を対象にして、LSI による学習スタイル分析を実施する。

また本研究では、分析結果を用いて、職業会計士としての倫理教育や職業意識に有効なガイドラインと教育手法の提示を行った。倫理教育は我が国での会計大学院制度の導入の際にすでに実施されているが、諸外国とは異なり、その経験やノウハウの蓄積はまだ不十分である。また、近年、職業会計士が深く関与した大企業の粉飾決算やインサイダー取引などの不正な会計行為が頻繁に起こっており、再発防止のために職業意識や倫理観の重要性は認識されている。この点、諸外国の先行研究では、職業会計人としてあるべき知識スキルやジェネリック・スキル (generic skills) の修得を、学生の学習スタイルの観点から検証しているものがある (たとえば Marriott, 2002)。本研究はそれらの先行研究を参考に、職業会計人としてあるべき意識や倫理観の修得を、学生の学習スタイルの観点から明らかにすることを試みた。

さらに本研究では、諸外国との比較研究により、文化的要因を考慮した学習スタイルの研究を進めた。本研究では文化的要因の意味を厳密に定義するため、権威的研究者である Hofstede の Value Survey Model 94 (VSM94) の質問票を利用し (Hofstede, 2001)、学問的裏付けの下で研究を遂行し、日本に固有の特徴や問題点を明確に把握することを試みた。サンプル採取の対象は、

日本の他に、オーストラリアとベルギーの学生についても質問票を実施し、彼らの学習スタイルの分析および日本の学生との比較検討を実施した。

#### 4. 研究成果

##### (1) 学習スタイルに関する研究

質問票調査により、日本の5つの大学とオーストラリアの2つの大学で学ぶ学部大学生から合計96人を有効サンプルとして、彼らの学習スタイルと文化的影響要因についてデータを集計した。質問票には、学生に対する一般的質問、Kolb&Kolb(2005)の学習スタイル質問票、および Hofstede(1997) VSMYによる質問票を利用した。分析結果からは、オーストラリアの学生は行動の中から学ぶスタイルを好むが、日本の学生は見たり聞いたりする受身の学習スタイルを好むことが判明した。本研究の結果より、IFACは、文化的要因が学生の学習スタイルに影響を与えることを考慮したうえで、会計教育の国際的統一を進めていくことを示唆した。研究成果報告は、下記の主な発表論文等〔雑誌論文〕の①が該当する。

##### (2) オーストラリアからのサンプルを追加した研究結果

上記の研究報告で指摘されたオーストラリア会計学生のサンプルを29人から61人に増やし、再度分析を試みた。結果は、上記研究と同じく、オーストラリアの学生は行動の中から学ぶスタイルを好むが、日本の学生は見たり聞いたりする受身の学習スタイルを好むことが統計的に有意を持って示すことができた。研究成果報告は、下記の主な発表論文等〔雑誌論文〕の①が該当する。

##### (3) イタリア・ベルギーからのサンプルを追加した研究結果

上述の日本とオーストラリアで会計を学ぶ学生を対象とした研究結果を進展させ、ベルギーの会計学生から収集したデータを加えて新たに分析を行った。研究の目的は、会計教育の国際的統一の流れの中で、文化的要因が会計を学ぶ学生の学習スタイルにどのように影響を及ぼすかについて検討することにある。文化的要因と学習スタイル間に想定される理論の実証を実施するため、日本、オーストラリア、ベルギーの4国の会計学生をサンプル対象とした。結論は、ベルギーからのサンプルを加えても特に個人主義の国出身の学生が「行動して学ぶ」スタイルを好むのに対して、集団主義の国出身の学生は「観察して学ぶ」スタイルを好む傾向にあることが明らかとなった。研究成果報告は、下記の主な発表論文等〔学

会発表〕の①が該当する。

##### (4) 日本と中国の会計学生を対象とした会計倫理教育とその効果に関する研究結果

本研究は、日本と中国の大学における大学生の会計倫理学習経験と彼らの倫理的理由づけの能力との関係を調査するために実施した。調査方法は、質問票を利用したサーベイ方式を採用し、日本の4大学および中国の2大学で学ぶ3年生と4年生から回答を回収した。質問票では、Kohlberg(1969)に基づくRestのDIT (Defining Issue Test)、学生の高校での倫理学習経験、大学での一般的倫理学習経験および大学での専門的倫理学習経験の回答を依頼し、データの分析を行った。結果として、①日本の学生は中国の学生より倫理的理由づけ能力が劣ること、②両国の学生とも高校時の倫理学習経験が倫理的理由づけ能力に有意に関係があることなどが明らかとなった。研究成果報告は、下記の主な発表論文等〔雑誌論文〕の②が該当する。

##### (5) 日本の会計大学院で学ぶ学生の学習スタイルと印象に関する研究

本研究の主な目的は、2006年に実施された公認会計士制度改革の目的達成度合いと進捗状況を調査することにあつた。本研究では、日本の会計大学院で学ぶ大学院生に対して質問票を利用した実態調査を行い、制度改革の目的である公認会計士の質的および量的な拡大を達成するに足る状況が存在するか否かを調べた。分析の結果、第1に、新公認会計士制度施行後、受験者層の多様化が達成できていることが確認できた。第2に、職業会計人を志す学生は職業決定時期が大学4年時や就職後が多く、諸外国と比較しても相対的に遅いことが明らかとなった。第3に、会計大学院で学ぶ学生たちは、大学での授業や職業経験、実務家、ニュース報道などにも大きく影響を受けて、進路を決定してきたことが明らかとなった。研究成果報告は、下記の主な発表論文等〔雑誌論文〕の④および⑤が該当する。

また、日本のアカウンティング・スクールで学ぶ学生が公認会計士を志望するときに影響を与える要因についても調査した。特に、就業経験、性別、公認会計士になるための機会費用および公認会計士のイメージなどの要因に注目して調査を行った。調査の結果は、就業経験があり、会計や経営以外の科目を学部で専攻していた学生は、アカウンティング・スクールで学んでいても、あまり公認会計士を志望しないことが明らかとなった。研究成果報告は、下記の主な発表論文等〔雑誌論文〕の③および⑥が

該当する。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ① Sugahara, S., and G Boland “The role of cultural factors in the learning style preference of accounting students: A comparative study between Japan and Australia” *Accounting Education: An International Journal*, 2010, 近日発行予定, 査読有
- ② Sugahara, S., N. Urasaki, M. Wei and G Boland “The effect of students’ ethics learning experiences to develop ethics reasoning abilities: A comparative study” *International Journal of Accounting, Auditing and Performance Evaluation*, 2010, 6(1), pp.54-79, 査読有
- ③ Sugahara, S., and G Boland “The accounting profession as a career choice for tertiary business students in Japan – A factor analysis” *Accounting Education: An International Journal*, 2009, Vol.18, No.3, pp.225-272, 査読有
- ④ Sugahara, S., K. Hiramatsu and G Boland “The factors influencing accounting school students’ career intention to become a Certified Public Accountant in Japan” *Asian Review of Accounting*, 2009, Vol.17, No.1, pp.5-22, 査読有
- ⑤ 菅原智・平松一夫「会計大学院で学ぶ学生の実態調査」『企業会計』2007年、59巻5号、82-96頁、査読無
- ⑥ Sugahara, S., and G Boland “Perceptions of the Certified Public Accountants by accounting and non-accounting tertiary students in Japan” *Asian Review of Accounting*, 2006, Vol.14, No.1/2, pp.149-169, 査読有

[学会発表] (計4件)

- ① “The impact of cultural factors on students’ learning style preferences: A global comparison between Japan, Australia, Belgium and Italy”, European Accounting

Association (EAA), 2009 Annual Congress, Tampere; Finland, 2009年5月, 査読有

- ② “Perceptions of Generic Skills for Accounting Professionals by Japanese Accounting Faculty and Practitioners”, Asian Pacific Conference on International Accounting Issues (APC), 2008 Annual Conference, Paris, France, 2008年11月, 査読有
- ③ “The role of cultural factors in the global convergence of accounting education”, European Accounting Association (EAA), 2008 Annual Congress, Rotterdam; Netherlands, 2008年5月, 査読有
- ④ “The factors influencing career intention to become the Certified Public Accountants among students at the Accounting Schools in Japan”, International Association for Accounting Education and Research (IAAER) 2007 Annual Conference in Mexico City, Mexico, 2007年9月, 査読有

6. 研究組織

(1) 研究代表者

菅原 智 (SATOSHI SUGAHARA)  
広島修道大学・商学部・准教授  
研究者番号：40331839

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし